昭和二十九年六月十日　初版印刷
昭和二十九年六月十五日　初版發行

昭和文學全集38
島木健作
岡本かの子　集

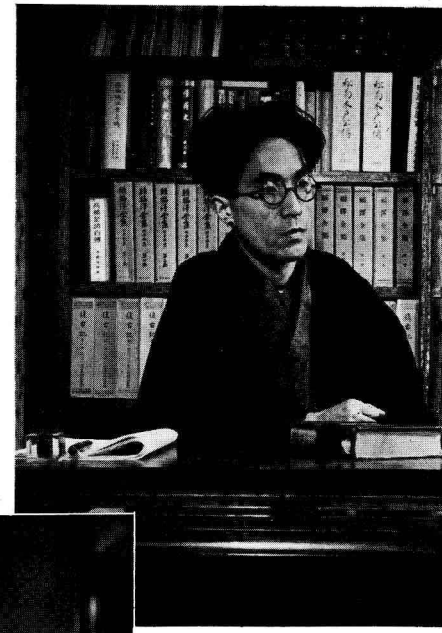
著作者　島木健作
　　岡本かの子
發行者　角川源義
印刷者　仙葉元太郎
東京都新宿區東大久保二ノ七八

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段〇一二一・〇一二四

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロース工業株式會社
整版所　曉印刷株式會社
印刷所　中教印刷株式會社

★★★

Printed in Japan



島木健作
昭和十五年（三十七歳）
扇谷自宅にて

岡本かの子
昭和九年（四十六歳）
青山自宅にて

島木健作
岡本かの子 集

昭和文學全集

角川書店版

本書由爾雅出版社提供PDF請洽詢 www.ertongbook.com

目次

島木健作集

筆蹟

生活の探求　九
癩　一一四
盲目　一三七
第一義の道　一五五
黒猫　一七八
赤蛙　一八三
扇谷日記　一三六　一三五　一八三　一八七

年譜　一八八

岡本かの子集

筆蹟

鶴は病みき　一九五
母子敍情　二一一
河明り　二六一
巴里祭　二九三
金魚撩亂　三一三
花は勁し　三三五
雛妓　三四七
家靈　三六五
老妓抄　三七一
東海道五十三次　三八二
世界に摘む花より　三一三　三三四　三六六　三六四　三八一

年譜　三九一
解説　龜井勝一郎　三九六

巻頭寫眞　島木健作
岡本かの子

島木健作集

礎

島木健作

生活の探求

今年は春から雨の降ることが少なかつた。山林を切り開いて作つた煙草畑まで、一町餘りも下の田の中の井戸から、四斗入りのトタンの水槽を背負つて、傾斜七十度の細い畦道を日に幾度となく往き還りする老父の駒平の姿はいたいたしい。時には握飯を頬張りながら、葉煙草に水をやつてゐるやうな姿を見ることもある。

今年大學にはいつた息子の杉野駿介は、病氣が治り、健康がすつかりもとに返つても、なぜか東京へ歸らうとはしなかつた。彼は高等學校から大學に進むとほとんど同時に、まだ新學期も始まらぬうちに、感冒から肺炎を引き起して倒れたのだつた。一時は危險だつたが幸に命をとりとめた。東京の病院を出るとすぐに、病後の養生のために田舍の家へ歸つてもう三月からになる。

休暇が來ても、並の學生のやうに、その度毎に歸鄕するといふことは事情が許さぬところから今度もほとんどまる二年ぶりで見る息子を、殊に病後であつて見れば、一日でも長く手許に引きとどめておきたいといふ氣持には切實なものがありながら、理由もなくさうして一日一日と出京の日を延ばしてゐる息子の心のうちが解せなくて、親達は不安であつた。しかしその不安を、面と向つて、口に出して云つてみるでもなかつた。自分達の傍を離れて、異つた環境のなかに、いつの間にか大人になつてしまつたやうな息子に對する、愛情とは別なものではない、遠慮や氣兼ねのやうなものがあるのだつた。息子が身につけてゐる都會的なものや、知識的なものはある場合にはたしかに、障碍であるとはいへた。しかしそれは、親達にとつては、喜ばしき障碍とでもいふべきものだつた。このやうな青年がこの家の息子であるといふことが、何か不思議な、嘘のやうな氣のする時もある。しかも息子は、さういふ青年にまで、自分を、ほとんど自力で築き上げたのである。

それだけに老父はまた、時々云つて見ずにはゐられぬのだつた。

「駿、お前、まだ東京へは行かずともいいのかえ？　學校はもう疾うに始まつてをるんやらうが。」

息子が世話になり、幾らかの學費をそこから得てゐるといふ人の思惑をも、老父はその律儀な腹の底で、色々に思ひ廻らして見ないわけにはいかなかつた。

駿介は、しかし、曖昧にしか答へなかつた。必ずしも、何等かの理由で、はつきり答へることを避けたといふのではなくて、答へようにも、彼自身、今後の身の去就について迷ひ、なほ心を定めかねてゐるのだつた。

彼は、何か眼に見えぬ大きな力に引かれるやうな、また、ぼんやり心に求めてゐるものを探り當てようとするやうな氣持で、毎日、村のあちらこちらを歩き廻つた。自分の生れた村の生活をこのやうに、落ち着いてゆつくり見るといふことは、今までの彼にはなかつた。今までは、たまに歸鄕しても、長くて一週間もゐるのがせいぜいで、その間も閉ぢ籠りがちで、近所の人々とも寛いで話すといふこともなく、親達にさへ非常に物足りぬ感じを與へて、そそくさと忙しく立ち去つて行くのであつた。休暇を利用して學資を稼ぐ彼は、事實忙しくはあつたのだが、一般に村の生活に對して別に特別な關心をそそられぬからでもあつた。理由なく侮蔑的な眼で鄕土を見る氣持はあつても、愛着の心はさらになかつた。今にして思へば自分ながら解しかねる心地がするのだが、貧しい苦學生で、そのやうなことについては人一倍聰く心が働く筈でありながら、時々歸つて來ればいやでも眼につかずにはゐない筈の、生家の、農家としての暮し向きについても、案外にぼんやりした氣持で過して來たのだつた。それが今度は違つてゐた。そしてそれは必ずしも彼の今までの滯在期間の一週間が、三ヶ月に延びたといふ理由によるものではなかつた。それは一に

需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼の内部の變化に基づくものなのであつた。

季節は春の終り、夏の始めにさしかかつてゐた。山の松林には松蟬がよく鳴いて、日中は眞夏の暑さの日もあつた。麥はもう刈られてゐるところがあり、しかしまだ殘されてゐるところの方が多かつた。どの家もまだ刈り出さぬうちに、自分が先きを切つて刈りに出るのは氣おくれがする。しかし誰かが刈り出すと、にはかに氣忙しくなつて、我も我もと驅り立てられるやうに先を急ぎ後れまいとする、そのやうなのが百姓の心理だと駿介は聞かされたことがある。麥の畑に出てゐる人が案外少いのは、そのやうな心理が、今日は降るか、明日は降るかと、雨を待ち望んでゐる心とたたかつてゐるのでもあらうか。刈つてゐる最中に降られるのは困ることだ。刈り取つて畝にならべた麥は、水を含んで、立毛の時のやうには早く乾かない。積み上げた麥の束は、濕氣に蒸れて、粒が腐敗するといふこともある。さういふことは、駿介の子供の折の記憶にもある。

四月、五月とこの二月、雨らしい雨をほとんど知らなかつた。

今が伸びざかりの、胡瓜や隱元など蔓生のものは、支柱からはるかに餘つた蔓の先を、生きもののやうに風に靡かせながら、下葉はちりちりに燒け枯れてゐた。胡瓜は、親指に少し太いほどの實で、萎んだ花の名殘をまだその先につけながら、青枯病に罹つて立ち枯れてゐるものもあつた。

風下に立つと、日向のトマトの一列ぴがほのかに匂つた。十四五の男の子が一人、經木帽をかぶつて、トマトの芽を摘んだり、黃色い小さな花を間引いたりしてゐる。

子供の一群が、何か聲高に罵りながら、村道を走つて來た。手にバケツを下げたり、笊を持つたりしてゐる。勢込んで來た先頭の一人が、畑の間の細い道を來て村道へ出た駿介につき當らうとしてわづかに身をよけた。とたんに持つてゐたバケツが一搖れ搖れて、なかから跳ねて出たものがある。泥鰌だつた。鞦の緣の、燒けた土埃りの上に落ちて、くるつくるつと輪を描いた。子供はちらつと駿介の顏を見上げると、手づかみで泥鰌をとらへ、バケツのなかに放り込んで、後を振り向き振り向き走つて行つた。

山の煙草の畑に向ふ、曲りくねつた傾斜の道を、駿介は今上つて行くのであつたが、時時立ちどまつては、手でそつと左の胸のあたりをおさへて、心臟の動きの、規則正しい音を聞いた。當然やや早目ではあつても、それは、力强い、彈力のある、健康なひびきで打つてゐた。この間やはりここへ散歩の足を運んだ時には、この道を上り下りするだけで胸が高鳴り、呼吸が亂れ、顳顬のあたりがづきづきして顏がほてつた。離れて下から見ると、足が宙に浮いてゐるやうな、寸の詰つた恰好で、老父は畝の間に蠶いてゐる。肩に擔つた水桶に手足が生えて動いてゐると云つた方がいいやうなその姿に、胸をつかれ、その時は急いで山道を上つたのだつた。三度に一度は自分が代らうと云ひたいその時の氣持であつたのだが、少し急いでさへ息切れのするやうな身體に、水を擔ぎ上げるなど、到底話にもなることではなかつた。

煙草はもうだいぶ前に、苗床から本畑に移されてゐた。規定通り、畝幅三尺四寸に盛り上げられた土の上に、三尺の間隔をおいて規則正しく植ゑつけてあつた。丈は四五寸に伸びて、淡灰綠色の葉が四枚から六枚ぐらゐ、節每に二枚づつ相對してゐる。初夏の晝の光が代赭色の傾斜一ぱいに流れて、碁盤の目なりにおかれた煙草は、濃い影を落し、くすんだ艶々しさに映えて美しかつた。砂質の壤土は燒け切つてゐる。煙草が根つくまで水をやらねばならぬ老父の仕事は雨が降るまでは終らない。駿介は畑の緣に腰をかけて、こつちに背なかを見せた老父の動きをぢつと見詰めてゐた。彼はまだ氣づかぬふうだ。やがて振り返つた。駿介を見るなり、腕で横なぐりに額の汗を拂つて、

「何とまあよく照るこつたか。今日の新聞の豫想は何とぢやらう。」

日をまともに受けて、皺深い顏がくしやくしやになつた。

「今日も一日よい天氣ださうですよ。さつき役場のラヂオを聞いたけど、やはりおんなじ

ことでした。
「所によつては驟雨がある、とは云はなんだかい。」
「さあ……聞かなかつたなあ。」
一段落つくと、駒平は、仕事の手をやめて駿介の傍へ來て、列んで腰をかけて休んだ。
「ともかく、早う一雨降つてもらはにやどもならん。これぢや根つきもおくれる。」
「專賣局からの檢査は何時でしたつけ。」
「もうぢきだ……六月にはいつてからだ。日は何れ組合から知らして來ようわい。」
「今年は豫備はどれくらゐ植ゑたんです。」
「八號地に」と、駒平は幾つかの畝のうち、そつちの方を指さして、
「あすこんとこが豫備だ。五十本ぢや。規則ぢや、豫備として三十本から五十本までええといふことになつとるけに、どうせ作るんなら、多く作らにや損やけんのう。」
下の方から聲がして、妹のじゆんが上つて來た。十時の飯と飲み水とを運んで來たのである。桶のなかの殘り水に浸した手拭ひで顏と手を淨め、扁平な漆塗の箱を開いて駒平は食ひ始めた。黑胡麻をまぶした、黑い麥飯の握飯が七つ八つ、ぎつしりつまつてゐる。糠味噌に漬けた小蕪と鹽鮭の切身が一つ、その上に乘つてゐる。握飯を一つ食ひ終る毎に、駒平は、鹽味のある指先をぺろぺろと嘗め、藥罐の水を、注ぎ足し注ぎ足し飲んだ。
「これで、何だ。今年もかうして、水のためにえらい目えして、それでもまあどうかかうか檢査もすまし、いよいよ適熟期といふ時になつて、大風にでも吹かれようもんなら、全く目もあてられんことになるけんのう。昭和六年がさうぢやつた。また八年がさうぢやつた。去年はどうやら事なくてすんだが、さあて、今年はどうだやら。——何せえ、煙草といふ奴あ、手數のかかるもんさね。」
駿介も父の湯呑みを借りた。注いだ水を、日陰でぢつとすかして見て、それから飲んだ。いつもながら、腹の底にまでしみる冷たさだつた。藥罐の蓋の內側は、冷氣が凝つて、小さな玉を結んでゐた。しかし、かなりひどい濁りやうだ。駿介はじゆんに訊いた。
「これ、うちの井戸の水なんだらう?」
「ええ。」
「やつぱり濁つてるな。」
「だつて今朝も近所のみんなが來て汲んでつた、そのあとなんだもの。鈴木んとこの井戸も、伊東んとこの井戸も、朝一ぺん汲むと、もう底の泥が立つて、土色になつてしもうて、使へんさうな。鈴木ぢや、今日が風呂の番ぢやによつて、晩にはまたよろしくお賴申しますつて、よくよく賴んで行つたがな。」
「しかし、うちのだつて、もう釣瓶が底につかへるんだらう。」
「そりや、みんなしてああがいに汲めば、さうやけど、どうにか使へるのは今ぢやうちのだけなんだから。」
「お父つあん、どうかな。こなひだも話したけど、今年の日照りを機會に一つうちの井戸の掘り下げをやりませんか。僕が手傳ふから。」
駿介は父の方に向きなほつて云つた。
「さうさな。俺らもな、自分の足腰のまだしやんとしてゐるうちに、あの井戸は掘つ返してえもんだとは、かねがね思つてはをるんだが。ことに今年みたやうに水の出が惡いやうぢやのう。あの井戸は、部落の衆のためには、これまでずゐぶん役立つて來とるんぢやけに。ぢやが……」と駒平は、後の言葉を濁した。
「やりませうよ。是非。僕が手傳ふから。」と、駿介は繰り返した。なぜに彼がさういふ仕事にそんなに興味を持つか、人にはわかりかねるほどの、熱心さで云つた。
「お前が手傳ふつて。物好きな。口でいふほど、さうた易い仕事とでも思ふんけ。」と、駒平は笑つた。
杉野の家は、山裾の、部落の他のどの家よりも高いところに位置してゐる。その家の裏手の井戸も、深く掘られて、ほとんど四間に近い。筋のいい水脈に掘りあて、山底の水を集めて、淸冽玉の如くであつた。水の味がいいと云つて、褒めないものはなかつた。夏には、かなり離れたところからも、バケツや、藥罐などを下げて、飲み水や冷し水をもらひに來た。いつとはなしに、誰が名づけたとい

ふこともなく、その井戸は、「玉水の井」と呼ばれ、人々を潤ほして來たのであつた。玉水の井が、常にも増して人々に多くの惠みを垂れるのは、丁度今年のやうに雨量の少い時であつた。どこの家の井戸も水が涸れて、底の泥が立つやうな時、玉水の井だけは、依然、清らかな水を豐かに湛へてゐた。飯をしかける時、輪番で風呂を立てるその番が廻はつて來た時、近所の人々は、玉水の井の存在の故に助かつた。ところが、その井戸が、ここ三四年來、夏期には、目立つて水の出がわるくなつて來たのだつた。そしてそれも無理がないと云へた。この井戸は今から五十年も昔、駒平の父の代に掘り、その頃少年だつた駒平はその仕事を手傳ひ、それ以後、掘り下げたことがないといふ古さだつたのだから。それだけの年月の間には、水脈にも變化がないとは云へなからう。そしてこのことは駒平を殊のほか悲しませた。この純樸な老人は、今までのやうに多くの人々に奉仕し、彼等を喜ばし得ぬことを悲しんだのである。杉野の家は、以前は村での有力者で、駒平の父は地方の政治に關係し、村での世話役的な仕事にも熱心だつた。しかし、駒平は父から、その名と共に、少なからぬ借財をも受け繼いだ。もともと多くはなかつた持地をそのために處分し、分家した兄弟達にも土地を割き、彼自身は普通一般の働く農民として、目立たぬ存在になつて行つたが、父の代の我家を知つてゐる彼は、村のために役立ち得ぬ自分を寂しく思ひ、さういふ彼にとつて、玉水の井は實に小さな一つの慰めであつた。降雨の少いことでは國中にも名があり、川らしい川の無いこの地方は、少しの日照りにもすぐ水が涸れる。夏の日、裏の井戸に近所の人々が通つて來るのを見る駒平は樂しげだつた。

「おらの生きとるうちの仕事の一つに、どうあつてもこの井戸はおらの手で掘つ返さにや。」

出がわるくなり、濁りがちな水を見ては、駒平はさう云ひ云ひした。

しかし、同じ仕事に向ふ駿介の熱心さの出どころは駒平とはちがつてゐた。彼は何も井戸掘りでなくてもよかつた。彼の家の麥は近く刈られる。そのうちには煙草の葉の乾燥も始まる。彼はそのどつちにも自ら參加しようと思つてゐる。彼は今痛切に肉體的な勞働を欲してゐた。彼は、心身がある一つの對象に向つて統一された狀態にあることを、張り切つた力の感じ、充實感と云つたやうなものを、深い自覺に於てといふよりは、ほとんど本能的な欲求として、渴くやうな氣持で求めてゐたが、さういふ彼の求めに最も端的に應へてくれるものが肉體的な勞働であらうといふことは肯ける。心身の力を出し切つて、荒荒しくぶつかつて行けるやうなもの、さういふ機會を彼は欲してゐた。それは單に、病後の休養にも倦みはじめた若い肉體の、生理的な要求に過ぎないものであらうか。それはさうであつたらう。だが同時に、それはもつと深いところに根ざしてもゐるものだつた。彼は自分の過去に訣別しようとしてゐた。脱出の道のない、泥沼のやうな觀念の世界にはまり込んで、脱け道がないといふことのなかにかへつて陶醉してゐたやうな過去に別れようとしてゐた。他人の生きた經驗をそのまま據り所とするわけにはいかぬ、先づ自分自からがほんとうに社會を生きて見なければならぬ。彼はそのやうな一般的な意志を持ち始めたが、もしもこれが、今から七八年も前であつたなら、新しい道は具體的な、明確な道を取つて彼の前に開けたであらうが、今はさうはいかなかつた。彼の歩みは、何か生活的なもの、實質的なもの、中身のぎつしり詰つてゐるもの、生産的なもの、建設的なもの、上附かずにじつくり地に足のついたもの、さういふ内容一般に强く心を惹かれると云ふ、きはめて漠然とした抽象的な姿において始められたのである。ちやうどさういふ時、彼の村の生活は、彼の前に展らけたのである。それは新鮮な魅力だつた。村の生活のどんな小さな斷片でもが、生々とした感情を彼に呼びさまさずにはゐなかつた。

「掘り下げて、底を深くするだけやつたら、大して造作もないこつたが、それにやまづ、井戸側の石をすつかり取り拂つて、それからまたそれをもともと通り積み上げにやならん

けんのう。」

四間からの深さの井戸側は、全部、さまざまな形の大きな自然石でがつちり築き上げられてあつた。

「そのやうにしてかからにや、だめなもんですか。」

「ああ。井戸の掘り下げには、まづ井戸側を外してからかかるのがまつとうなやり方としてあるもんぢや。」

「ほう。」

「不精して、側の石をそのままにしてかかるものもないことはないが、さうすつと、掘り下げ中に側が崩れ落ちてからに、底で作業中の者が生き埋めにならんとも限らんのぢや。」

「ああ、成程な。」

「ずんずん掘り下げて行くぢやらう。ところで底が深くなるつてことは、底と、側を固めとる石との間に、それだけ隙間が出來るといふことぢやらう。側を支へとるものは底ぢやけになな。その隙間さ持つて來て、井戸側ぜんたいの重みが上からずんとのしかかる。一たまりもないわけやらうが。おらなぞは昔からそんな騒ぎを、たくさんに見もし聞きもしとる。つい三年ほど前に、元山（村）の八田の息子が蛙みたやうにつぶれ死んだのなぞもやつぱしそれぢや。井戸掘りは土質については案じるものだが、後で話に聞いたら、八田のとこはやつぱし砂地ぢやつたさうな。それぢやたまらんわ。年寄りが知らん筈ない。はたして年寄りが町さ出てゐる間にやつたといふことぢやつた。」

「しかし、その土質といふ點を云つたら」と、駒平は續けた。「うちのはいいんぢや。うちのは粘土質の赭土ぢやからね。上からのずり落ちも萬々なからうとは思ふんぢやが……」

そして、ぢつと考へこんだ。

頸筋をつたはつて流れる汗が、喉の凹みにたまつたのを、彼は大きな手の平ではじいた。はだけた胸はおどろくほど厚くがつしりしてはゐるが、やや萎みたるんだ感じの皮膚の上には、老の黑いしみが點々とちらばつてゐた。

やがて彼は心を決したらしく云つた。

「やつて見るかなあ、ぢやあ一つ。今年こそはと思つて、一年一年のばしとるうちに、おらもそれだけ年をとり、からだも弱る勘定ぢや。そのうちに、いつ何時、何事が起つて足腰立たんやうになるやも知れたこつちやない。我が手にこれが出來んといふことになつちや、末代までもの心殘りぢやけに。」

「で、今の話、井戸側の石を引き上げるといふことはどうするんです。」

「さうだなア……そりや、すつかりとは引き上げんでもよからうわい。」

「さうすると？」

「上、半分だけは取りのける。下の半分はそのままにしといやつて見る。」

「大丈夫ですか。」

「大丈夫ぢや。」と、きつぱり云つた。

「明日の朝から早速かからう。煙草の方は二三日おつ母さんに代つてもらふわ。じゆん、お前おつ母さんの手傳ひせにやあかんぞ。」

「さうだ、じゆんはおつ母さんを手傳ふがいい。おれはお父つあんを手傳ふから。」と、駿介は愉快さうだつた。

「井戸のことがなくたつて、煙草の方は少しお父つあんに代らにやならんとさつきもおつ母さんは云つとつた。——わたしのことはいいがな。兄さんはしかしだめにきまつとるが。」

「なんでだ。」

「なんでだと云つて……」

力仕事など、をかしくつて、と嗤つてゐる氣持が調子にあらはれてゐる。

「何を生意氣な。」と云つて、駿介も笑つた。

「さうだな。誰かまた近所の衆を一人頼まんことにや。」

「なあに、おれアやるよ、お父つあん。」

しかし駒平は答へず、ほかのことを云ひ出したことで、取り合はぬふうを示した。

二

駿介は足を開いて立ち、胸を張つて、兩腕をかはるがはる風車のやうにまはした。それから帶革をしめ直した。腰のあたりの感觸が久しぶりのものだつた。長い間押入れの奥に押し込めておいたものからは、ほのかに濕り

氣のにほひがする。色のさめた帶革の上には灰いろの黴の花が浮いてゐる。無造作にその上をこすつた手を繼の多い洋袴になすりつけ、洋袴の裾を高くたくつた。

上はシャツ一枚の姿である。頭を包んだ手拭ひをきりりと引きしめながら、駿介は上り框の方へ行つた。土間に深く射しこんでゐる日の色はもう夏だが、朝のうちは風が爽やかである。

地下足袋の爪をかけてゐると、うしろに足音がして、駒平の聲であつた。

「なんと、えらい恰好やな。ぢやあ、ほんとにやる氣かえ。」

さういふ駒平ももう仕度をしてゐた。懸念するいろとからかふやうないろとが、笑ふと子供のやうな無邪氣さになる彼の眼や口のあたりにうかんだ。昨日からの駿介の言ひ分を信用しないと云ふのではなくて、病後の息子を避けたいのであつた。

駿介は默つて、笑つて、土間の隅から畚を持ち出して來て、その出來ぐあひを調べてゐた。昨日、裏山からかづらの蔓を切つて來て、彼自身の手で作つた目の荒い畚である。四隅の釣紐の部分をとくに念入りに見た。

「けども、なんしろがいに力のいる仕事だでな。病みあがりのお前にはなんとしても無理なこつちや。寺田ン家の源次でも賴んだらとおら思うとるんやが。」

「源次？　寺田の。ああさうか。あれもいい若いものになつたでせうね。」

「あゝ、もう十八やからな。今年ももうちつとしたら岡山さ稲刈りに誘はれて行くやらうわい。――源次を賴むかね、ひとつ。」

「まアいいや、お父つあん。おれ、やつて見るから。――寺田なんどぢや、今もあつちこつちさ賴まれて行くんだらうが、百姓の日當は此頃ぢやどれくらゐしてゐるの。」

「まア七十錢が相場ぢやな。よつぽどよくつて八十錢ぢや。四五年前までは九十錢から一圓が相場ぢやつたが、それ、縣の匡救事業なあれが始まつてから下つたんだ。匡救事業が七十錢だもんで、それが百姓の日當の通り相場になつたわけさな。」

「ぢやあ、人氣がわるいわけですね、救農工事は。」

「さうだな。此頃ぢやこぼしてゐるものも多いやうだな。」

火鉢の前で一服してゐた駒平は、煙管ををさめて立つた。

「そりや一頃は百姓の懷を溫ためはしたどもな、なんといつても匡救事業は年百年中の事ぢやないわ。ところがそのために一般に下つた百姓の日當は、二度と上ることはまアちよつと無いものと見んならん。長い間には結局損するといつたやうなわけぢや。雇ひもし雇はれもするものはいいとして、雇はれる一方のものはつらいわけぢやろ。」

「お父つあんは地下足袋にはせんのか。」

そこに腰をかけて足ごしらへにかかつた駒平は、地下足袋ではなくて草鞋だつた。

「うん、地下足袋ぢや滑つて危なうてどもならんわ。」

「ぢやあ、おれも草鞋にしようかしら。」

「お前はそれでええ。お前は外だからな。おらは井戸のなかさはいらんならんのぢやけに。」

二人は裏口から外へ出た。

井戸はすぐそこにあつた。傍の大きな柳の木が、井戸の上にまで長く枝をのばしてゐる。秋になつて、風が枯葉を水のなかに落すまでは、枝も葉も、そのまま繁るに任せてある。

井戸側を築き上げてゐる自然石は、地面の上に四尺ほど出てゐる部分も、非常に大きく、年を經て苔むし、ゆるぎないさまに見えた。駿介は緣に手をかけてなかをのぞきこんだ。常にも增して、水面まで奧深く、はるかなものに見えた。下から吹き上げて來る冷氣が顏を拂ふ。今朝も近所の人達が汲み上げて行つたあとなのであらう、目立つて水底が淺くなつた感じの水面が、朝の光りの滿ち溢れてゐる空を映して、白く光つてゐる。しだれた柳の枝と、井戸の外側にからみつき、次第に內側にまで這入つて行つた蔓草の蔓が風に吹かれてゆらぐのと、駿介の顏とがその白さのなかに影をおとした。駿介は子供の氣持になつて、身をのばすやうにすると底に向つて大きな聲で呼んだ。太い聲で歸つて來る木靈

を三度四度、彼は無心でたのしんだ。

彼は子供の時、溜池から取つて來た鯉をこの井戸の中に放つたことがあつたのを思ひ出した。

「始めるかな。」と駒平が云つた。

駒平が手にしてゐる道具は、鐵梃一本だつた。彼はその鐵梃のさきで、石と石との間のわづかな隙をコツコツ叩いてゐた。しつくりと組み合はさつたまま、何十年もの年を經て、セメントで固めてあるわけでもないのに、所によつてはただ一枚の石でもあるやうである。鐵梃のさきはものの急所をでもさぐるかのやうに動いてゐた。と、ぐつと力がはいつたと見ると、それはある隙間めがけて喰ひ込んだ。駒平は體勢を變へ、足を大きく開いて踏ん張つた。鐵梃に胸を押しつけると、體全體の重みと力とがぐつと加はつた。土がパラパラと落ちて、石はずり動いた。こじられるに從つて、隙間は大きくなり、石は浮いて行つた。

「よし——さテ持たう。」

鐵梃を放り出して、駒平はきりつとして云つた。最初に動き出した石は、一人では到底持てさうにもない大きさだつた。

「ああ、これをはめたがええ。」

ふと氣づいて、駒平はふところからよごれた軍手を取り出して投げてよこした。駿介はそれをはめて、石の一方を持つた。駒平は裸の手のままだつた。二人はそれを持ち上げて、少し離れた平地の上へ運んで行つて、ころがした。

そのくらゐのことでも、それは駿介には力のいる仕事だつた。滿身の力をふりしぼらねばならぬ仕事といつてよかつた。ただその一回で、彼の全身の血潮は熱くたぎつて流れた。顏がほてつて顴顬のあたりがづきづきした。彼は腰のふらつくのを感じて、石を持ちながら踏む一足一足に鋭い注意をそそいだ。

「よしか——足もとに氣イつけて。」

そして石は地ひびきを打つて、地に大きな凹みをつくつて、ころがつた。はずみをつけて石を投げ出し、二足ほど後じさつた時、駿介は、風呂からあがつた時などによく經驗するやうな、立ち眩みを感じた。汗がにはかに流れ出て來た。はげしい呼吸の亂れを駒平には氣づかれまいとして何か云ひたい聲をおさへて、息苦しさに堪へた。

「なんしろ古い話だで。おらが十かそこいらの時だつたんぢやから……」

はじめてこの井戸が掘られた當時のことを駒平は思ひ出してゐるのだつた。さういひながら一本の鐵梃を巧みに使ひこなして、次々に石を崩して行く六十五歳の老父の、力に滿ちながらゆとりのあるものごしに駿介は見惚れてゐた。彼の足の踏まへ方や腕の張り方や、その一擧一動が精彩を放ち、感動をもつて駿介にはながめられた。神經痛が起つて、いかにも所在なげに長まつてゐる時の、老父の姿はそこからは思ひ浮ばなかつた。

「そら——落すぞ。」

石が少し小さくなると、さきのやうに二人で運んで行くといふことでなしに、駒平はその場でどんどん地面へころがしていつた。身をよけて、そのさまを眺めて、ぼんやり立つてゐるやうな駿介に、駒平が

「早う、運ばんけい。」と云つた。駿介はハツとして、ひどくあわてた氣持で石に抱きついた。そのあるものは彼一人の力にはほとんど餘るほどの重さだつた。彼は腰を曲げ、引きずられて前へのめるやうな恰好で運んで行つたが、堪へかねて途中で落してそれからは轉がして行つた。その後ろから駒平が、

「またこつちへ運ぶんぢやけに、なるべく運びいいやうに並べとけえよ。」と叫んだ。そしてせつせと自分の仕事をつづけた。駿介は恥しさを感じた。さういふ、老父の自分に向つての短いきつぱりした言葉なり態度なりは、駿介が心の隅のどこかで、無意識のうちにひそかに豫想してゐたものとはちがつてゐた。少くともそれは彼を甘やかす、もしくはただいたはるだけのものではなかつた。しかし駿介は、そのやうに撫でられることを心のどこかで豫想してゐなかつたとは云へなかつた。駒平の言葉なり態度なりには、もちろん冷たいものなどはなかつた。また、自分の調子を意識して、未熟な若いものを慣らさうとの教訓的なものでもなかつた。しかしそれは

读要完整PDF请访问：www.ertongbook